

飛べない鳥は夜に羽ばたく——籠^{かご}の鳥2

僕は相変わらず籠の中にいた。

でも、ご主人様が毎朝新しい食べ物と水を用意してくれるし、籠の掃除だってしてくれる。

それに、最近は籠の掃除の間だけ、外に出してもらえる様になった。

もちろん、外といっても籠の外であって、ご主人様の家の外ではない。

それ以外の時でも、ご主人様は気^{きまぐ}紛れに僕を籠の外に出そうとするけど、まだ籠の外に出るのはちょっと怖い。

だから、余程気分のいい時でないと、なかなか自分から外に出ようとは思わない。

でも、鳥籠の掃除の時だけは僕がいると邪魔になるといって、ご主人様は容赦なく僕を籠から追い出すのだ。

「うわぁ、やめてよ！」

背後から追い立てるご主人様の巨大な手を逃れる様にして、僕は必死に羽^{はね}をバタつかせるんだ。

幾らご主人様には悪意がないと分かっているけど、やっぱりその時は恐怖に足元がガタガタ震えてしまう。

そして耐え切れなくなって必死に羽を動かし、ご主人様の魔の手が届きそうにない、部屋の天井近くにある止まり木まで逃げおおせるのだ。

そんな事をほぼ毎日の様に繰り返していたから、空を飛ぶのもかなり上手になったし、籠の外へ出るのもかなり慣れてきたと思う。

この前なんて、自分からご主人様の肩の上に止まりに行ったんだよ。

そうしたら、ご主人様が着ている物^かって、僕の足の爪が上手く引っかかって止まり木より止まりやすいし、嘴^{くちばし}で噛んでも噛み心地がいいんだ。

ついつい夢中になって、同じ場所ばかりを集中的に噛んでいたら、変な糸のような物が飛び出してきちゃった。

それがまた、とっても噛み心地が良くて、しばらくの間噛んだり引っ張ったりしていたら、いきなりご主人様に怒られちゃった。

何で怒られたんだろう？

でも、あんなに楽しい物が籠の外にあるのなら、未だにちょっと怖い気持ちも残っているけれども、籠の外も悪くないかも知れないなぁ——なんて感じている今日この頃です。

えっ？

僕の友達？

もちろん、今も毎日の様に遊びに来ているよ。

友達は元々が外で生まれて、ずっと外を自由に飛び回りながら暮らして来たから、僕とは逆に鳥籠の中が怖いって言うし、ご主人様が怖いって言うんだ。

そりゃあ僕だって、自分よりずっと体が大きいご主人様が『怖くない』って言ったら嘘^{うそ}

になるし、今でも僕に向かってご主人様の手が伸びるとビクビクしちゃうけど、でもご主人様が毎日色々と世話をしてくれなければ、僕は今頃ここにいる筈がないのだから、ご主人様に向かって『怖い！』なんて言ったら罰が当たっちゃうな。

本音を言うと、やっぱりちょっと怖いけど。

でも、ご主人様も何の気紛れからなのか、僕を籠ごと外に出して日向ぼっこをさせてくれる時に、僕の食べ物を籠の周りに撒くようになったんだ。

そうしたら目ざとい僕の友達がすぐに見つけて、

「わあ、^{おい}美味しいね、これ」

といいつつ、僕の事なんかそっちのけで食事に夢中になっている。

「ねえ、ねえったら、ねえ」

としつこく呼びかけて、再三友達の気を惹こうとしても、

「ちょっと待って、これ食べてからね」

と、僕は後回しにされてオマケ扱い。

余りに悔しかったので、思わず、

「この食べ物がそんなに美味しいかい？　僕は毎日ご主人様からもらっているけど？」

と憎まれ口を叩いてから、以前嫌な思いをした記憶が甦^{よみが}ってハッとした。

ああ、もしかしたら心にもない余計な一言が原因で、また友達との関係がギクシャクしてしまうのだろうか——そんな心配も程なく杞憂^{きゆう}に終わった事を知って、僕は思わずため息を漏らしながら胸を撫で下ろしたものだ。

しかも、友達ったら、

「いいなあ。毎日こんなに美味しい物が食べられるなら、籠の中の生活も悪くはないかな」

なんて、これまでの友達の発言からは想像もつかない事を言うから、僕は可笑^{おか}しくなって思わず笑ってしまった。

ついこの間までは、僕の事を『自由気ままに大空を飛び回れないなんて、可哀想^{かわいそう}』と言っていたのに。

一体、友達は普段どんな食べ物を食べているんだろうか。

今度会った時にでも聞いてみようか。

そう言えば、最近友達が余り顔を見せなくなった様な気がするのだけど、一体どうしたのかなあ？

今度の夏は、今までの夏と比べても凄く暑かったから、今頃は夏バテの後遺症で大人しく巣^{こも}に引き籠っているのかなあ。

それとも、『暑い夏なんか嫌いだ！』って、勢いで自由気ままに北を目指して、たまたま見つけた心地^{こころよ}いいリゾート地にでも移住する事にしたのかな。

それだったら、出かける前に一言くらい挨拶^{あいさつ}してくれてもいいのに。

あるいは、時々はここに戻って来てくれて、北の涼しくて過ごしやすい異世界の話をしてくれるとか。

でも、まさかとは思うけど、もしかしたら外の世界にいる怖い化け物——確か毛むくじゃらで丸くて大きな目をしていて、僕の頭なんか丸呑みしてしまう程大きな口を開けると、僕の爪の先や嘴の先よりも鋭くて硬くて長い牙が一杯生えているのだとか——にでも、襲われてしまったのかしら。

以前、友達から毛むくじゃらの化け物の話を聞いた時には、この籠にいる限り化け物に襲われる心配もないと、余り気にしていなかったのだけど、もし友達が襲われてしまったとしたら他人事ではいられない。

最近は僕だってかなり飛ぶのが上手になったと思うし、今でも毎日練習をしているから、いつかは外に出て自由に大空を飛び回る日が訪れるかも知れない。

でも、もし外で化け物に出会ってしまったらと考えると、何だか足が竦んでしまう。

ああ、そんな事を考えていたら、友達の様子が本当に心配になって来た。

もし僕にこの鳥籠を自由に通り抜ける力があったら、今すぐ友達の様子を見に飛んでいくのに。

でも、よくよく考えてみたら、僕は友達の巣がどこにあるのかも知らないし、普段どこでどんな食べ物を食べているのかも、どこへ遊びに行くのかも知らないのだから、当てもなく友達の行方を捜して彷徨う事になりそうだ。

ただでさえ外の世界には慣れていないのだから、友達を捜すどころか自分が迷子になってしまうかもしれない。

それに、一度外の世界へ足を踏み出せば、ご主人様の元で食べ物や水の心配をしなくて済む生活には、きっと二度と戻れないだろう。

それでも外に出たいかと問われれば、僕にはまだその自信もなければ、そうしたいとも思わない。

やっぱり、僕は以前友達に言われた様に、どこまで行っても所詮は籠の鳥から抜け出せないのかなあ。

時々食べ物を啄んだり、考えるのに疲れてしまってうつらうつらと居眠りを挟みつつも、一日の大半をそんな事を考えて過ごしていた。

以前は、友達が頻繁に遊びに来てくれていた頃は、毎日がもっとずっと楽しかったのに、最近は何だか気が重いなあ。

もしかしたら、明日辺りには友達がひょっこり顔を出して、僕を驚かせたり喜ばせたりしてくれるかしら。

そして、また心地よく羽を揺らす風の音にあわせて、二人で気の向くままに歌を口ずさんだり、時間の立つのも忘れる程色々な話に興じたり出来るだろうか。

＊

友達は、あれから一向に姿を見せない。

『もしかしたら、毛むくじゃらの化け物に襲われてしまったのかも』——僕の心の内に

芽生えた密かな不安は、時間を経るに従って徐々に全身に広がって、鬱^{うつ}になってしまいそんな様々な悲劇的な考えが、頭の中を掠^{かす}めては消えていった。

その中でも、特に僕にとって嫌な二つの思いは、『友達が化け物に襲われてしまった』可能性と、僕が気づかないうちに友達を傷つけてしまった為に、『友達に嫌われてしまった』可能性だった。

それがどちらであっても、僕にとっては耐え難い心の苦痛だし、そのどちらでもなかったとしても、僕の目の前に友達が再び姿を見せてくれない限り、僕の心労は当面止みそうにない。

『ああ、明日は友達が遊びに来てくれるだろうか』——そんな微かな期待を胸に秘めながら、幾度の夜を過ごしただろうか。

もう、いい加減 諦^{あきら}めた方がいいよ——心の中で、もう一人の僕が声をかける。

でも、僕は友達との繋がり^{つな}を諦めたくはなかった。

今すぐには来れない事情があっても、きっといつか僕に会いに来てくれる。

だって、僕にとってはかけがえのない友達だもの。

それとも、友達に対するそんな思いは、結局僕の勝手な思い込みで、僕の独りよがり^{ひとりよがり}に過ぎなかったのだろうか。

信じたくはない——でも、時の流れが積み重なる程、一日、そしてまた一日と、朝日の訪れ^{おが}を拝む回数が増えるに連れて、少しずつ友達に対する諦めの感情が僕の心を支配していった。

そして友達の事、僕の事、外の世界の事を考えて一日を過ごし、夜になったら寝る——そんな単調な毎日を送っていた。

ご主人様は、最近僕の元気がないみたいだと、一応心配してくれているらしい。

でも、僕は空を飛ぶ鳥で、ご主人様には羽が生えていないのだから、僕の気持ちを完全に理解してはもらえないだろう。

とにかく、今は風の音に合わせて歌う気力もないし、静かに大人しく、一人で色々な事を考えていたいんだ。

心配をかけて、ごめんなさい。

そんな僕の気持ちが、どの程度伝わっているのかは分からないけれど、ご主人様はこれまでと変わらずに毎日新しい食べ物と水を与えてくれて、鳥籠^{むりじ}の掃除もしてくれて、空を飛ぶ練習も以前程は無理強いをしない。

何だか色々な事を一杯考え過ぎて、全身が何となくだるいし、普段は余り使わない頭を一杯使ったから知恵熱が出てしまったのか、心持ち頭がボーっとする。

この所慣れない考え事ばかりしていたから、体の具合がおかしくなってしまったのだろうか。

別に痛いとか、苦しいといった嫌な感覚はないのだけど、頭が熱を持って意識^{もろろ}が朦朧^{もうろう}としている。

風邪を引くって、こんな感覚なのかな——唐突^{とうとつ}にそう思った。

もっとも、僕の場合はただの疲労だと思うけど。

こんな時はさっさと眠って、体力を回復するに限る。

そう思って、いつもの定位置で体を丸めて、静かに目を閉じた。

が、何故か今日に限ってなかなか寝付けない。

それとも、もう既に眠っているのだろうか。

今日は昼間から頭が熱を持ってボーっとしていたから、半分夢見心地の気分^{ひた}に浸っていた様なものなのだ。

だから、今も寝ているのかどうかさえ定かではない。

ただ、体がちょっと疲れたのと、友達^{こたま}の消息が非常に気がかりな事、それだけが僕の心の中に木霊していた。

そのままの状態、どの位の間じっとしていただろうか。

ふと気がつくと、遥か頭の上の方から、聞き覚えのある声が僕を呼んでいる様な気がした。

「誰？」

僕は熱っぽい頭をゆっくりと動かして、僕を呼ぶ声の方を見上げると、鳥籠の遥か上の方から、キラキラ光る綺麗^{きれい}な丸い玉が、少しずつ僕の方へ向かって降りて来る所だった。

その光の玉は、やがて少しずつ形を変えて、終いには丸くて小さ^{しま}な鳥の形になった。

「もしかして、君は……」

それは、僕がずっと心配して、訪れる日を待ちに待っていた友達だった。

よくよく見れば、かつての見慣れた友達の姿とはちょっと違う様な気もするし、第一こんな夜遅くに僕の元へ飛んで来られる筈はないのだけれど、それでもちょっと変わった姿のそれは、紛れもない僕の友達だった。

ほんのちょっと位見た目が変わったって、唯一無二の友達を見間違える筈がないでしょ？

僕は^{あらた}改めて、友達に声をかけた。

「やあ、久しぶり」

「やあ」

「今まで一体何処^{どこ}へ行っていたんだい？」

「うん……」

何故かは分からないけど、友達はその話題に触れたくないらしい。

本当は、友達が消息不明の間にどこへ行っていたのか、とても興味があったのだけど、嫌なものを無理に話をさせる訳にも行かない。

そんな無理を押してへそを曲げられて、今度こそ本当に友達に嫌われてしまったら、やっぱり僕は寂^{さび}しく感じてしまうだろうから。

今は『友達が帰って来てくれた』だけで充分で、それ以上を望むのは欲張りと言うものだ。

どうせ、これから幾らでも話を聞く機会はあるのだし。

「そういえば、キミはずっとボクの事を心配してくれていたみたいだね。ありがとう」

「そんな、友達ならば当然だよ」

「うん。実は今日ボクがここへ来たのも、キミが友達だから迎えに来たのさ」

「えっ？ 迎えに来たって、どういうこと？」

「そうか、キミは知らないんだな。キミはここから旅立つ時が来たんだよ。これから、ボクと一緒に長い長い旅をするのさ」

「旅をするって、そんな急に言われたって、ご主人様にも挨拶しないといけないし、それにまだ外に出る自信がないよ」

「フフフッ、大丈夫さ。だって、キミは毎日の様に空を飛ぶ練習をしていたじゃないか。とても上手く飛べていたから、きっと練習通りに飛べば上手く行くよ」

「そうかなあ……」

まさか、僕の空飛ぶ練習を友達が見ていたなんて思わなかったから、^{きは}気恥ずかしくなつてちょっとテシたけど、面と向かって褒められて嫌な気はしない。

「でも、飛ぶって言ったって、この鳥籠を潜り抜けるのは無理だよ」

「そうかな？」

言うなり、友達は^{たやす}いとも容易く鳥籠の中に飛び込み、更に一瞬の^{はやわざ}早業で鳥籠から抜け出した。

「どう？ 簡単でしょ？」

「えっ？ どうして？」

その余りに見事な身のこなしに、僕はすっかり目を丸くしていると、友達は友達で『意外な反応』とでも言う様に、^{けげん}怪訝な表情を浮かべている。

「キミだって出来るじゃない。ほら、やってみなよ」

僕は友達に促されるままに、最初は^{つばさ}翼の先端を恐る恐る鳥籠の外に突き出してみた。

「あれ？」

僕の予想に反して、^{あっけ}翼は呆気なく硬い棒の^{すきま}隙間をすり抜けた。

念の為、今度は丸まった嘴の先で鳥籠を突付いてみる。

「あれ、どうして？」

鳥籠を突付こうとした嘴は、呆気なく硬い棒の隙間をすり抜けた。

「だから言っただろう？ さあ、そんな狭苦しい鳥籠から飛び出して、ボクと一緒に大空へ飛び立とうよ」

友達の笑顔に答えて、僕は今までにない位に大きく翼を羽ばたかせた。

友達の羽と同じ様に、いつの間にか僕の翼もキラキラ輝く光の粒を一面に^{まと}纏っていた。

(了)

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん , All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。